報道関係各位

姫路市立美術館
Himeji City Museum of Art

2024年4月17日
【6月13日更新版】
姫路市立美術館

姫路市出身の写真家・小川晴陽の展覧会、7月より開催

特別企画展
「小川晴暘（おがわ せいよう）と飛鳥園（あすか） 100年の旅」開催

2024年7月6日（土）～ 9月1日（日）
姫路市立美術館 企画展示室（兵庫県姫路市本町68-25）

姫路市立美術館（所在地：兵庫県姫路市／館長：不動美里）は、**姫路市出身で仏像写真を芸術の領域にまで高めた写真家・小川晴暘**と、彼が創設した飛鳥園の歩みを紹介する**特別企画展「小川晴暘と飛鳥園100年の旅」**を、7月6日（土）～9月1日（日）の会期で開催します。

小川晴暘《中宮寺 菩薩半跏像（伝如意輪観音菩薩像）右斜側面》
©Askaen.inc

《報道関係者お問い合わせ先》
姫路市立美術館 広報事務局（TMオフィス内）担当：馬場・永井・西坂
TEL：090-6065-0063（馬場）　090-5667-3041（永井）
テレフォンセンター：050-1807-2919　FAX：06-6231-4440　E-mail：himeji@tm-office.co.jp

姫路市立美術館 公式WEBサイト
https://www.city.himeji.lg.jp/art/
アクセスコード▶

展覧会概要

本展は、奈良を中心に各地の仏像を撮った写真家・小川晴暘（おがわ・せいよう　1894-1960）と、彼が創立した仏像撮影専門の写真館・奈良「飛鳥園」の活動を辿る展覧会です。兵庫県姫路市に生まれた小川晴暘は、画家を志して上京しますが、奈良で仏像などの文化遺産に感銘を受けたのを機に写真に傾注するようになります。1922年、美術史家・書家・歌人として知られる會津八一の勧めで奈良に「飛鳥園」を創業し、奈良の仏像や寺院を中心に文化財・文化遺産の撮影に精力を傾けました。撮影だけでなく東洋美術の研究にも熱中し、奈良に居を移した志賀直哉や京都大学総長も務めた濱田青陵をはじめ、文化人・知識人との交流も深めました。さらに奈良だけではなく、中国の雲岡石窟、韓国の石窟庵、仏国寺、インドネシアのボロブドゥール遺跡など、アジアの文化遺産の調査・撮影も積極的に行いました。本展は、小川晴暘・光三親子の写真作品を中心に、文化財保護活動を支えると同時に仏像写真を芸術の域に高めた飛鳥園の活動を振り返ります。飛鳥園に保存されている写真およびその原板や機材にくわえ、小川晴暘が調査の際に遺したスケッチや拓本、晴暘が発刊した『仏教美術』などの古美術研究専門誌や文献資料もあわせ、古美術・文化遺産を愛した小川晴暘という人物の姿にも迫ります。

開催概要

タイトル：小川晴暘と飛鳥園 100年の旅

会期：2024年7月6日（土）～9月1日（日）
※休館日　月曜日（7月15日、8月12日は開館）、7月16日(火)、8月13日(火)

開館時間：10：00～17：00（入館は16：30まで）
会場：姫路市立美術館　企画展示室（〒670-0012　兵庫県姫路市本町68-25）

観覧料：一般1,000（800）円、大高生600（400）円、中小生200（100）円
※（　）内は20人以上の団体料金

問い合わせ：姫路市立美術館　電話番号 079-222-2288

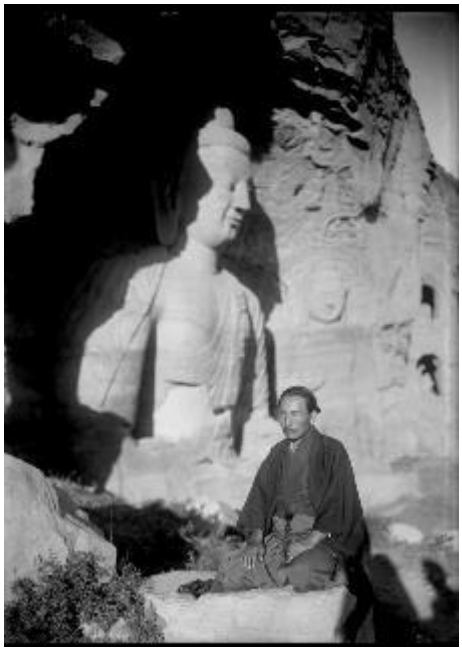
主催：姫路市立美術館、毎日新聞社

特別協力：飛鳥園

講演会、ギャラリートークなど、会期中イベントを予定しています。

小川晴暘プロフィール

1894（明治27）年姫路市に生まれる。本名は晴二。
幼少時より絵を好み、1911（明治34）年上京して、
写真師丸木利陽のもとで働きながら太平洋洋画研究所で
絵を学ぶ。
1918（大正７）年《雪解の頃》で文展洋画部に入選。
同年朝日新聞に入社した。奈良の文化財に魅せられ、
入社と同時に奈良に居を移した。1922（大正11）年、
歌人で美術研究家でもあった會津八一の勧めで新聞社を
退社し、奈良に飛鳥園を開業する。
以後仏像を中心に国内外の文化財の撮影、調査研究を行う。
また文化人や美術研究者たちと交流を持ち『仏教美術』や
『東洋美術』などの古美術専門誌を発行する。
海外では中国山西省大同郊外にある雲岡石窟や、
韓国慶州の石窟庵などを訪れて撮影と調査を行った。
彼の写真は文化財の記録・資料という枠を超えて、
仏像写真を芸術の域にまで昇華させたと評される。



小川晴暘《雲岡石窟》
＊写真の人物が小川晴暘

見どころ

1　有名な仏像写真を多数展示

切手にも採用された、中宮寺の菩薩半跏像など、有名な写真を多数展示。小川晴暘と光三それぞれが同じ仏像を撮影した写真で、作風の違いなども見ることができる。

2　写真だけじゃない！画家としての小川晴暘の紹介

文展入選の《雪解の頃》など、絵画作品も展示。
小川晴暘の画家としての側面も紹介する。

3　海外の仏教遺跡を伝える

雲岡や敦煌、ジャワ島など海外の仏教遺跡の写真を小川晴暘、光三親子の作品で紹介。特に雲岡石窟は、小川晴暘の手になる全長約20mの雲岡全図のスケッチも合わせて紹介する。

展覧会構成

第１章　小川晴暘と飛鳥園

奈良国立博物館の北側にある東西の道を挟んで向かい合う位置にあるのが、仏像など文化財の撮影を専門とする写真館・飛鳥園である。飛鳥園は1922年（大正11年）に小川晴暘（1894-1960）が創業し、100年余りの歴史を持つ。

姫路市に生まれた小川晴暘は、写真館で働きながら洋画を学んだ。しかし、奈良の仏像や文化遺産に心を打たれ、朝日新聞社への入社を機に奈良を拠点とした。その後、會津八一（1881-1956）との邂逅が転機となり、新聞社を辞して飛鳥園を開いた。
飛鳥園は三男の小川光三（1928-2016）に引き継がれ、現在は孫の光太郎が経営を担う。

晴暘の写真は《芸術》《報道》《広告》といった枠組みに収まらないものであるために、近代日本写真史の中で取り上げられる機会はほとんどなかった。しかし、被写体の背後にある文化への洞察と写真技術によって創り出されたイメージは、記録や資料という以上に、自立した写真作品としても美しさを放っている。

作品解説

小川晴暘
《新薬師寺金堂　十二神将・伐折羅大将像》

伐折羅大将の写真は、顔の正面から光を当て、大きく見開く目、今にも声を発しそうな口、深く刻まれた眉間のしわを陰影で描写する。顔の側面や怒髪の先端は黒く潰れ、背景に溶け込み、瞬間的な忿怒の激情だけを写真に閉じ込めた。晴暘は角度を変えて撮影したというが、伐折羅大将の右肩越しの本写真が有名となった。
出来映えも最も秀でている。

小川晴暘
《東大寺法華堂　伝月光菩薩像》

伝月光菩薩像は胸前で合掌する動きのほとんどない静かな像で、彩色が剥落し灰色を呈した肌色と切れ長の目を持つ。三月堂本尊にも似た優美な顔貌は、法華堂造像群の中でも際だっている。
法華堂二度目の撮影は大正末年ごろのことであったらしい。この頃すでに小川晴暘の写真が奈良のみならず、全国の美術愛好家や研究家に知れ渡っていた。

展覧会構成

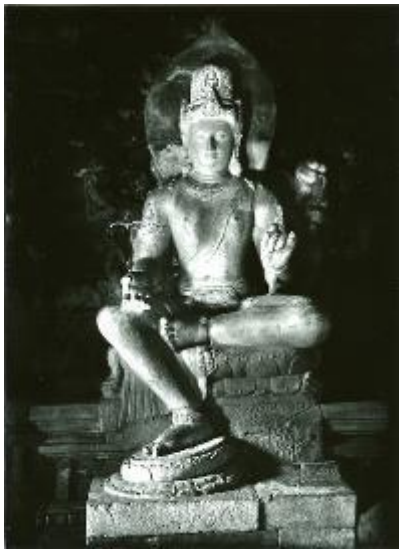
第２章　小川晴暘とアジアの仏教美術

小川晴暘は1926（大正15）年、建築学者の天沼俊一とともに朝鮮半島へ渡り、慶州の仏国寺と石窟庵の撮影を行った。仏国寺は韓国政府が1973（昭和48）年に大規模修理を行い、1995（平成6）年に『石窟庵と仏国寺』としてユネスコ世界遺産に登録されたが、晴暘が残した写真は日本統治時代の状況と当時の修復の様子を伝えている。その後、晴暘の眼は広くアジアの仏教文化へと向けられていくことになり、1929（昭和4）年、東洋美術研究会を設立し『東洋美術』を創刊する。1939（昭和14）年、中国山西省大同の雲岡石窟への撮影旅行を敢行した。拓本やスケッチといった貴重な資料も残し、精緻に描きこまれた大判スケッチには晴暘の画才が窺えて興味深い。戦火が激しくなる中、1943（昭和18）年と翌年の二度にわたり海軍報道班員として東南アジアへ赴き、インドネシアのボロブドゥール遺跡やカンボジアのアンコール・ワットなどの記録写真も残している。

作品解説

小川晴暘《雲岡石窟　第5窟　如来像》

雲岡石窟は中国山西省大同郊外にある北魏時代の仏教遺跡である。崖の南面に石窟が彫られ、中は無数の石仏で埋め尽くされている。
第5窟の外壁の壁龕の中にある如来像である。第5窟は前に木造の覆屋があり、この像はその建物の3階の明かり窓から見ることができる。如来像の頭部に焦点をあて、やや斜め下から見上げるような角度で、微笑みをとらえている。深い陰影に彩られた印象的な写真である。



小川晴暘《ムンドゥ寺　脇侍菩薩像》

ムンドゥ寺は、インドネシア・ジャワ州にある仏教遺跡で、8世紀末から9世紀にかけて建設された石造の寺院である。中には釈迦三尊像が祀られているが、この像はそのうちの脇侍菩薩像である。正面からの撮影だが、像の左側から光が当たり、深い陰影をつけている。海軍報道班員として東南アジアを訪れた際に撮影された写真である。

展覧会構成

第３章　小川晴暘から小川光三へ

小川光三（1928-2016）は晴暘の三男として奈良市に生まれた。父と同じく当初は画家を志したが、飛鳥園の経営と撮影を引き継いだ。1950（昭和25）年から５年間にわたり、文化財保護委員会の委嘱で全国各地の仏像を撮影している。

写真家としての代表作に、毎日新聞社から10年をかけて刊行した『魅惑の仏像』全28巻（1986-96）があり、これは一巻丸ごとを一体の仏像にあて、視点や光の変化で仏像の多彩な表情を切り取るという意欲作であった。父が明暗の諧調のみで表現するモノクロームで撮影していたのに対し、カラー写真ならではの色と光による表現に特色がある。とくに堂内での撮影では鏡を使って自然光を操りながら撮影することを得意とした。晴暘と同じ仏像を被写体とした作品も当然あるが、モノクロームとカラーの違いだけでなく、同じ仏像であってもイメージ化する際の視点の差が興味深い。

作品解説

小川光三《興福寺　阿修羅像》

興福寺の阿修羅像は憂いを帯びた表情や細身の体つきから「少年のような」あどけなさがある像としてよく知られているが、光三は「甘さがあるように思うのは、写真の光線の加減である。私共カメラマンにも責任がある」と手厳しい。その言葉通り、光三の写真には、仏殿での光を意識した下方からの光によって、一種超然としたたたずまいが表現されている。

小川光三《円成寺　大日如来像》

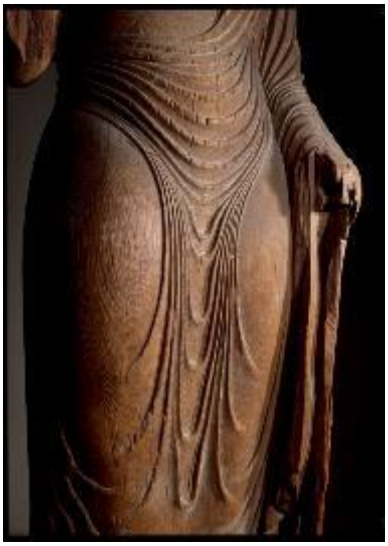
台座蓮肉裏の造像銘によって仏師運慶本人が筆を執り、また制作者の名前を記した最初期の例として重視され、中世へと時代の節目を迎える中にふさわしい若々しく新鮮な作風を示す像である。光三による写真は、造形的特徴の、はつらつとした新鮮さに加え、見るものをどこか深い意識へと導くような落ち着いた雰囲気が感じられる。

展覧会構成

第４章　飛鳥園100年の旅ー志を継いで

飛鳥園はその長い歩みの中で小川晴暘・光三親子以外にも何人かの文化財写真家を輩出している。晴暘に師事した写真家には、奈良の出身で後に長く東京国立博物館に勤務し、同館写真室長も務めた米田太三郎などがいる。小川光三は1968（昭和43）年に飛鳥園を株式会社化したが、同年入社して光三に師事したのが金井杜道であった。金井は1972（昭和47）年に京都国立博物館へ移り、同館を定年退官後もフリーランスの写真家として活躍している。飛鳥園の経営は現在、小川光太郎が担っており、所属写真家として撮影を担当しているのが若松保広（1956-）である。1978（昭和53）年に九州産業大学芸術学部写真学科を卒業して飛鳥園に入社、光三に師事し、現在も飛鳥園で活躍している。

作品解説



若松保広《唐招提寺　薬師如来》

旧講堂に安置されていた奈良時代の木彫像群の一つ。頭部と手先が欠失したトルソーとして広く知られた作品。おそらく薬師如来であったと考えられている。像の衣文線や肉体の凹凸に注目して撮影された。背景を暗くし、像の側面から強く光を当てる手法は飛鳥園的であるが、若松の写真の光は小川父子のそれよりもさらに優しい。

若松保広《西行庵》

小川光三と若松保広は仏像写真の他に四季折々の奈良の風景を撮影している。奈良県内の市街地はほとんどが奈良盆地にあるが、奈良の大半は山間部である。古代から連綿と続く祈りの文化をはぐくんできたのはこうした奈良の自然と風土である。

＊作品はすべて飛鳥園所蔵　©Askaen.inc

《報道関係者お問い合わせ先》
姫路市立美術館 広報事務局（TMオフィス内）担当：馬場・永井・西坂
TEL：090-6065-0063（馬場）　090-5667-3041（永井）
テレフォンセンター：050-1807-2919　FAX：06-6231-4440　E-mail：himeji@tm-office.co.jp
姫路市立美術館 公式WEBサイト
https://www.city.himeji.lg.jp/art/
アクセスコード▶